

「コンスタントのニューバビロン」×建築界(1)

Constant Neuenhuy's New Babylon×Architectural World 1

南後由和

Yoshikazu Nango

1 二〇〇〇年代のニューバビロン回顧

一九九〇年前後から気運を高めた、建築・アートの文脈におけるコンスタント・ニューヴェンホイス(Constant Neuenhuy's、アムステルダム生まれ、一九二〇—二〇〇五)の「ニューバビロン」(一九五六—七四)の回顧は、二〇〇〇年代に入っても続いている^[1]。二〇〇〇年一月には、デルフト工科大学でマーク・ウィグリー、サイモン・サドラー、ヒルデ・エナンなど、九〇年代後半にニューバビロン研究を牽引した批評家のほか、アーキグラムのピーター・クック、スーパースタジオのアドルフ・オナタリーニ、OMAの設立者に名を連ねたエリアセンゲリスなど、六〇年代後半から七〇年代にかけて

「後期」に区分することができる。ドクメンタ11への出展に際して、コンスタントは前期の模型だけの出展では参加しない旨をディレクターのオクウィ・エウヴェアーに伝え、後期の絵画まで総括的に展示するよう申し出た^[2]。晩年のインタヴューやシンポジウムのなかで、コンスタントは、時に苛立ちを覚えながら、自らが画家であることを繰り返し強調していた。

なぜなら、九〇年代、とりわけ英語圏でのニューバビロン回顧は、都市・建築論の文脈で進められ、前期から後期までの通時的な解釈というよりはむしろ、前期「ニューバビロン」がもつインタラクティブでエフェメラルな建築のあり様や、ユー Tobiaとしての都市のヴィジョンに過度な注目が集まったからである。母国オランダは別として、コンスタントは英語圏、主にアメリカでは先鋭的なアーバニストとして、フランスなどのヨーロッパでは、画家としての認知度が高い。アメリカではコンスタントを取り上げた最初の大規模な展覧会である、九九年の「ニューヨーク・ドローイングセンター」での企画展^[3]がコンスタント自身初の渡米の機会であったといふこと

ニューバビロンからの直接的、間接的な影響を受けながら活動を展開した建築家たちが一堂に会したシンポジウムが開催された^[4]。二〇〇二年には、グロバリーゼーション、ポストコロニアリズム、マルチカルチリズムをめぐる芸術と政治を基調として、カッセルで開催されたドクメンタ11に「ニューバビロン」が招待出品された。文化ステーション(Kulturbahnhof)会場のなかでは、最大の面積が与えられ、制作年の始点と終点である五六年から七四年まで約六〇の「作品」が展示された^[5]。

ニューバビロンの制作期間は大別して、模型を中心とし、ドローイング、彫刻、地図、リトグラフなどを有機的に連関させながら制作した「前期」と、六八年の五月革命を経て模型の制作を中止し、絵画へと回帰していく、六九年以降の

や、シチュアシオニスト・インターナショナル(以下SI、一九五七—七二)の実践が主宰者のギードゥボールと単線的に結びつけて受容されてきたことなどの背景があり、コンスタントの仕事は、隠れた「シチュアシオニスト」のもう一つの潮流^[6]として再発見されることになったのである。

二〇〇五年八月にコンスタントは、周囲から向けられる回顧のまなざしに看取られるかのようにして他界した。彼の死を受け、同年には、コンスタントの生涯を綴ったドキュメンタリー映画「コンスタント、旅立ちの前に」(Constant, Avant le Départ)が公開され^[7]、同年二月から翌年二月まで、ハーグ市立美術館では「コンスタントへの頌歌 Ode aan Constant」展が開催された^[8]。

日本では、二〇〇四年二月から翌年三月まで森美術館で行なわれた「アーキラボ—建築・都市・アートの新たな実験展一九五〇—二〇〇五」の入口に、リトグラフだけではあるが、ニューバビロンが展示されたことが記憶に新しい^[9]。かつて、部分的ではあるがコンスタントのプロジェクトを先駆的に日本に知らしめた大島哲蔵が指摘したように、ニュー